親馬鹿始末記

尾崎一雄

親馬鹿始末記

著者略歴
明治 32 年 12 月 25 日生。早稲田大學
國文卒業、昭和 12 年上半期「蜻氣眼鏡」
にて芥川賞を受く。主な作品に「蠟い春」
「なめくじ横丁」などがある。
現住所　小田原市曽我谷津

昭和三十三年七月十日　印刷
昭和三十三年七月二十日　發行

著作者　尾崎一雄
發行者　車谷弘
印刷者　加藤千太郎

發行所　文藝春秋新社
東京都中央區銀座西八ノ四
振替口座東京七八七四三番

本文印刷　圖書印刷
製本　中島製本

定價　二六〇圓

落丁亂丁の節はお買求めの書店
又は發行所にてお取り換え致します

© 1958 Kazuo Ozaki　Printed in Japan

目

次

裝畫清水崑

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

眞說親馬鹿の記　七
親馬鹿始末記　三一
華燭の日　五五
箱根越え　七七
あだ名はボス　一〇三
三日月お圭　一二一

何とかなるだらう　一三九
ボヤキの大岡　一六一
祖父　一八五
記憶のをかしさ　二〇五
玉樟　二二五
石　二四三

親馬鹿始末記

眞說親馬鹿の記

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一

尾崎士郎氏に、「二人の小說家」といふ短篇小說がある。その發表後、一年經つた三月の中旬、士郎氏はまた、東京新聞に再說親馬鹿の記といふ隨筆を書いた。再說、といふのは、すでに同氏が、昭和十五年の三月、都新聞（現在の東京新聞）に、「親馬鹿の記」といふのを書いてゐるからである。

「二人の小說家」は、種ヶ島音造、種ヶ島一作といふ同姓の小說家が偶然同じ頃長女をまうけ、これまた偶然和子といふ同じ名前をつけたことから、小說家の娘種ヶ島和子が二人出來上つたといふ事實を經に、友人たる兩種ヶ島の、今や全く消え去つた青春の殘影を悼むの情を緯として織り成された感傷篇であつた。士郎氏は、種ヶ島音造などといふ假名を使つてゐるが、これ

を尾崎士郎と置き直しても何ら不都合はない、いはばノンフィクションの小説であつた。それにしても、尾崎氏は、いかなる由來で、種ヶ島音造などといふ假名を使つたのであらうか。現代にあつて種ヶ島といふ古風な銃器が發する音響を、風雅なりと認めたのだらうか。尾崎氏の、自虐趣味ともいふべきものをちらりと認めるといふのは、私の非禮かも知れない。

「親馬鹿の記」には、尾崎一枝が二人出來たことについての感想が種々述べられてゐるが、それは、私が昭和九年九月に書いた「うちの赤ん坊」といふ隨筆を頭に置いての筆であることがうかがはれる。

「うちの赤ん坊」は、私方の長女一枝の赤ん坊振りを紹介した隨筆である。ところどころ拔いてみると、

「うちの赤ん坊は、三つは三つだが、十月十一日生れだから、今日で一年十ヶ月半にしかならない。人に齡をきかれれば、三つです、と答へるが、そのあとに、然し十月生れで——とつけ加へないとどうも氣がすまない。普通三つの赤ん坊と云へば、こつちがひがんでゐるせゐか、どれもこれもうちの兒より大きく見えて仕方がない。

一寸した都合で、出生屆が遲れた。あれは生れて二週間以內とかきいたが、何でも大分と遲れた。本當の出生日を書いて屆けたものだから、裁判所の判事に叱られて、その上科料一圓五十錢とられた。ある男が、どうせ遲れたんなら遲れついでに一月一日とでも屆ければ、年は一

つ若くなるし、一圓五十錢は助かるし、第一出世するにきまつてゐる、惜しいことをした、と云つた。なるほどと思つたがあとの祭りである。」

「うちの赤ん坊は、一體鈍感なのか神經質なのか判らない。去る五月の頃、種痘をして貰つたところが、初めからしまひまで眼を覺まさず了ひだつた。お醫者の辻山さんは、私も隨分種痘をしましたが、こんな赤ちやんは初めてですと云つた。あとで淺見淵に話したら、そりや兩親に似たんだ、と云つた。一方、僕が煙草をとつてくれといふと、赤ん坊はマッチを一緒に持つてきてくれる。うつかりしてゐると、煙草一本引拔いて、それを机の端でポンポンと叩いてくれる。」

「隣のレコードに合せて、東京音頭をよく踊る。コワー、コワー、と合の手を入れ、ウマイウマイと自分で手を叩いてゐる。」

「僕はよく、つまらぬことを自慢する癖があるが、その自慢の一つに、スリ鐘がある。子供の頃、村の祭りの花車の上で、馬鹿囃しの太鼓、小太鼓、笛に交つて、僕はスリ鐘の選手だつた。」

ある時家内が云ひ出した。『うち中でチンドン屋にならうか』

『チンドン屋かい。さうだねえ』

『あなたが鐘を叩いて、あたしが三味線彈いて、一ちやんが踊るの。はやるよ、きつと』

『うん』と云ひながら、僕は、暑い中を、汗を流し流し歩き廻つてゐるチンドン屋の姿を思ひ

うかべた。
『チンドン屋は、まアやめとかう』
『なぜ？』
『なぜつたつて、一ちやんには無理だよ。二三町は歩くか知れないが、あと續くものか。菓子屋の前あたりで、オカチ、アッター、なんて立止られたらお了ひだ』
『それもさうね』
『第一、幼兒虐待で、お巡りさんに叱られちまふ。をぢちやん唄はしてよ、といふのが七つ八つ位だが、それでさへ禁められたんだ』
『をぢちやん唄はしてよ、つての、なに？』
『さういふ商賣があつたんだよ』」

附記として、

「うちの赤ん坊は一枝といふのだが、尾崎士郎氏の娘も、うちのと同年輩で、やはり一枝さんといはれるさうだ。何でも士郎氏は、初め和江といふ字を使つたのだが、ある姓名判斷家の意見で一枝と改めたのださうで、それが本當なら僕はなか〳〵鼻を高くしていいわけだ。さういふ噂（ゴシップ）が何かに出てゐたと丹羽文雄が云つてゐた。さて、以下お伽話を書いてみる。僕がこれから何かの拍子で一人前の小說家になつたとする。娘も大分大きくなつてゐる。偶然

同じ學校に入ると、先生がまごついて、『あなたのお父さんの商賣は何です？』ときく。二人が『小說家です』と答へる。

『尾崎といふ小說家は二人居ますが、あなた方は兩方共一枝さんで、どつちがどうだか判らない。いつたいどつちの尾崎さんです？』

すると二人の小娘は、異口同音に『うちのお父さんは、小說がうまい方の尾崎です』――といふのだが、どうだか。もつともこれは、僕がつくつたのではない。丹羽文雄と淺見淵の合作である。」

この「うちの赤ん坊」の「附記」が士郎氏の頭にはあつたらしい。「うちのお父さんは、小說のうまい方の尾崎」といふのを、よオシ、と受けて立つたといふ面影がほの見える。とは云へ、私は、兩方の子供が口を揃へてさう云ふ「だらう」ところに面白味を感じたので、士郎氏と私と、どつちが小說がうまいか、などと云ふことを、いささかも念頭に置いたのではなかつた。

二

「親馬鹿の記」に對して、私は直ちに一文を草して「閑談」と名づけ、當時士郎氏などと一緒

にやつてゐた「文學者」といふ雜誌に發表した。「親馬鹿の記」で、士郎氏が、うちの子供の方があとから生れたやうに書いてゐるのが一寸氣になつたからである。うちの子供は昭和七年十月生れ、當時人森だつた士郎氏の一枝さんは、翌八年四月以後の出生の筈なのである。どつちが先に一枝と名づけたか、といふことが、今や私にとつて問題の焦點となつたわけである。私は、「閑談」の末尾で、『『親馬鹿の記』とこの一文とでは、事實の喰違ひがままある筈。どうでもいいことなのに、そんな所を頭に入れて書いたりして、先づは親馬鹿の見本といふところだ」と念を押してゐる。

昭和十五年と云へば、日華事變から大東亞戰爭に移行しようとする國家重大の秋で、山雨至らんとして風樓に滿つるの趣きがあつた筈だ。そんな風雲をよそに、親馬鹿ぶりを臆面もなく發揮する二人も一人だが、これを面白がる人も無いのではなかつた。都新聞の「垣のうちそと」が再三これを取り上げた。

「兩尾崎が夫々同じ年の娘に一枝と命名して、親爺どもがシンの籠つた對立をみせてゐることは、本欄に士郎物した『親馬鹿の記』に顯著なところ、この隨筆を一讀した一雄、何でう默すべきやと、前に送つた原稿を『お藏にして』『文學者』の『編輯部に無理を云つて』『閑談』なる一文を物し、大森尾崎にヤンワリと一矢をむくいた。これを讀んだ高田保、膝を叩いてキンキジャクヤク、いや實に愉快！　と友人の間をはね廻つて、この勝負どつちに分があるか？

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com